

母校が、我が国の将来を担う若者に  
大きな夢と希望を与えることの出来る大学として、  
ますます発展することを願っています。



# 退任

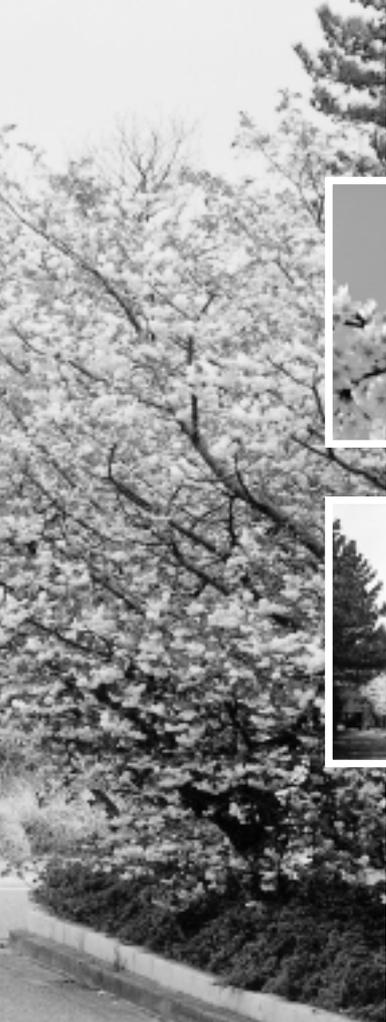


前学長  
荒川 正昭

## 退任の挨拶

平成十四年一月末をもって新潟大学を離れることになりました。

四年前、学長職に選出された時、非才を省みずお引き受けしたただ一つの理由は、私に学びの場を与え、私を育み鍛え、医師、教育者、研究者として今日まで社会に貢献できる機会をくださった母校・新潟大学を心から愛し、ここで学ぶ若者たちのために少しでも役立ちたいと云う気持ちからでした。在任中、この気持ちが変わることなく



持ちつづけ、全力投球出来たことを、心から感謝しています。

平成に入ってから今日まで、国立大学は少しずつ変わってきているのですが、現在のままではいけない、変わらなければならないという考えが、最近ようやく当然のこととして認識されてきていると感じます。

世間では、国民の税金で支えられている国立大学について、「何をやっているのかよく見えない」、「国民の期待に応えていないのではないか」、「大学の常識は世間の非常識ではないか」、といった素朴な疑問が広がっています。また、我が国の大学は、

「国際的な視点からみると、まだまだ十分でない」、「世界の舞台で競争できる大学を育てることが重要である」、「戦後創立されて五十余年、いささか構造疲労を来している」と云う声も聞こえてきます。最近の我が国の経済財政状態、社会構成の変化（十八歳人口の減少）などの客観情勢も加わって、国立大学の改革の必要性が大きく叫ばれ、現在急速に進められようとしています。

法人化と統合再編、評価とそれにつながる資源配分、特色化と役割分担（重点化）、定員削減、任期制導入や学部・学科の教員枠移動の可能などは、「許し難い暴挙であり、大学を衰亡させるものである」という声も一部にはありますが、多くの関係者は、悩みながらも、この改革は必要であると認識しているのではないのでしょうか。

新潟大学は、我が国の基幹大学、また地域の拠点大学を目指して、改革を進めてきましたが、そのグランドデザインも明らかにされ、第一歩を踏み出したといえます。私は、新潟大学は、真面目に、地道に教育研究に努力している人が大切にされる大学であって欲しい、無為な人たちの楽園であってはいけないと思っています。教職員の皆様が、英知を結集して、この改革の歩みを止めることなく、一步一步着実に前進すれば、必ずやその前途は輝かしいものであると信じています。

母校が、我が国の将来を担う若者に大きな夢と希望を与えることの出来る大学として、ますます発展することを願って、退任の挨拶とします。